

琉球大学学術リポジトリ

本学のFD活動のあり方について（答申）

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: 出版者: 琉球大学大学教育センター 公開日: 2018-07-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 天野, 輝久, 小田切, 忠人, 堀内, 敬三, 林, 弘也, 屋, 宏典 メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/20.500.12000/42027 |

平成16年3月11日

琉球大学大学教育改善等専門委員会

委員長 渡嘉敷 義浩 殿

同委員会WG1委員

○天野 輝久 (工学部)

小田切忠人 (教育学部)

堀内 敬三 (理学部)

林 弘也 (農学部)

屋 宏典 (遺伝子実験センター)

本学のFD活動のあり方について別紙のように答申します。

FD活動に関する本学教官対象アンケート調査

大学教育改善等専門委員会
FDワーキンググループ

はじめに

1. アンケート調査の内容と実施結果

1.1 調査項目・内容

1.2 実施結果

2. 調査項目ごとの結果と分析

2.1 調査概要（設問1～3）

2.2 FD活動のイメージ（設問4）

2.3 講義の自己点検

(1) 講義でうまくいっている点（設問5）

(2) 講義で改善したい点（設問6）

(3) 講義や実験等の準備で困っていること
（設問7）

2.4 FD活動の課題（設問8）

2.5 FD活動のあり方（設問9）

3. 本学のFD活動に関する提言

おわりに

はじめに

大学教育改善等専門委員会では、これまで共通教育等を中心に実施してきたファカルティー・ディベロップメント（Faculty Development）活動を、学部における専門教育をも含む形でより積極的に推進する必要があるとして、平成14年8月、本学におけるFD活動のあり方を検討するFDワーキンググループ（WG1）を設けた。WG1は本学における過去の経験を調べることから始め、各学部のFD活動プロジェクトや組織作りについて意見交換を続けた。

その間、本学では「中期目標・中期計画」が発表され、その中で、『教育の実施体制等に関する目標を達成するための措置の一つとして、教育能力や指導方法を向上させるための学内研究会を開催し、各学部においてもFD活動の組織化を図る』とする大きな目標・計画が打ち立てられた。

この目標・計画はいわばトップダウンで決められたものであり、WG1の作業に先行する形となった。そこでWG1としては、改めて本学のFD活動やその組織のあり方を具体的に検討するために、全教官を対象としてアンケート調査を行った。本報告はその結果を取りまとめ、本学のFD活動に関する提言を行ったものである。

1. アンケート調査の内容と実施結果

1.1 調査項目・内容

調査項目は以下の9つの設問からなっている。

回答者の属性に関する設問1～3に続き、本学教官がFD活動をどのように捉えているかを探るために、FD活動のイメージに当てはまる項目を選んでもらった（設問4）。次に、講義の自己点検として、うまくいっている点（設問5）、改善したい点（設問6）、講義や実験等の準備で困っていること（設問7）を答えてもらった。さらに、本学の中期目標・中期計画に掲げられたFD活動の活性化に関連して、各人がどのようなFD活動が最も重要と考えているか（設問8）、また、本学におけるFD活動のあり方（設問9）について自由に記述してもらった。

1.2 実施結果

アンケートは平成15年11月上旬、本学の全教官に配布され、1ヶ月後の12月上旬に回収された。約3分の1の教官から回答が得られ、学生部教務課教務係で集計・整理された。

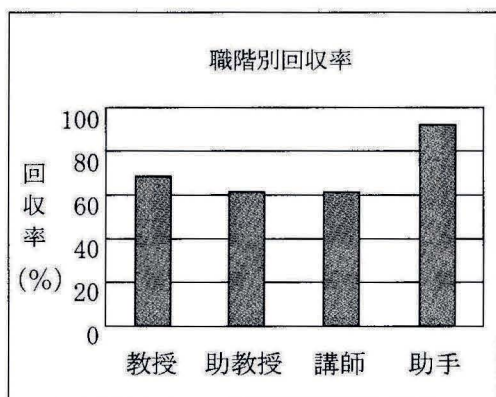
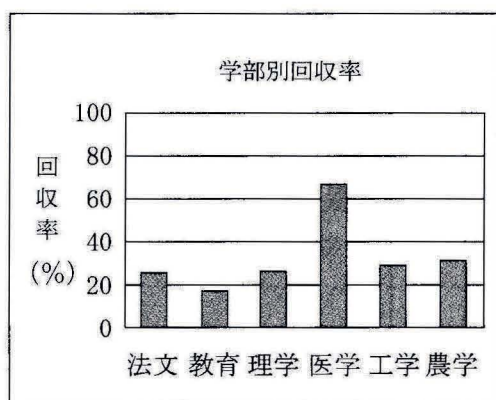
このような回収率の低さは、実際に講義で困っていないのか、問題に気付こうとしないのか、それとも多忙でこのような調査に関心を持つ余裕すらないのか、いずれがその理由か分らないが、FD活動が大学教官の仕事の一部という認識が未だ十分に共有

されていないことを露見させる形となった。しかし、回答として寄せられた意見の中には貴重なものが多く、我々が直面する課題の殆ど総べてが包含されているように思われた。そこで、回収率が低かったのでクロス表を作るなどの詳細な分析は避け、全体的な観点から見ていくことにして、本学のFD活動を進めるに当たっての切っ掛けが見出せれば良いと考えた。

2. 調査項目ごとの結果と分析

2.1 調査概要（設問1～3）

アンケートは本学の助手以上の全教官674名に配布され、236名から回答が得られた。全体の回収率は35.0%である。学部別に見ると医学部が66.3%と最も高く、大きな関心が示された。しかし、他の学部ではその半分以下であり、特に教育学部の回収率は17.4%と最も低かった。職階別では教授、助教授、講師に比べて、助手の回収率が高くなっている。なお、今回は教育歴（設問3）に関する分析は省略した。



2.2 FD活動のイメージ（設問4）

各人が抱くFD活動のイメージを探るために、次の13項目のうちから当てはまるものを自由に選んでもらった。これらの項目は次の文献から引用したもので、総べてFD活動の内容とされる（絹川正吉著：「序 FD (Faculty Development) とは何か」大学セミナーハウス編『大学力を創る：FDハンドブック』東信堂、1999年）。

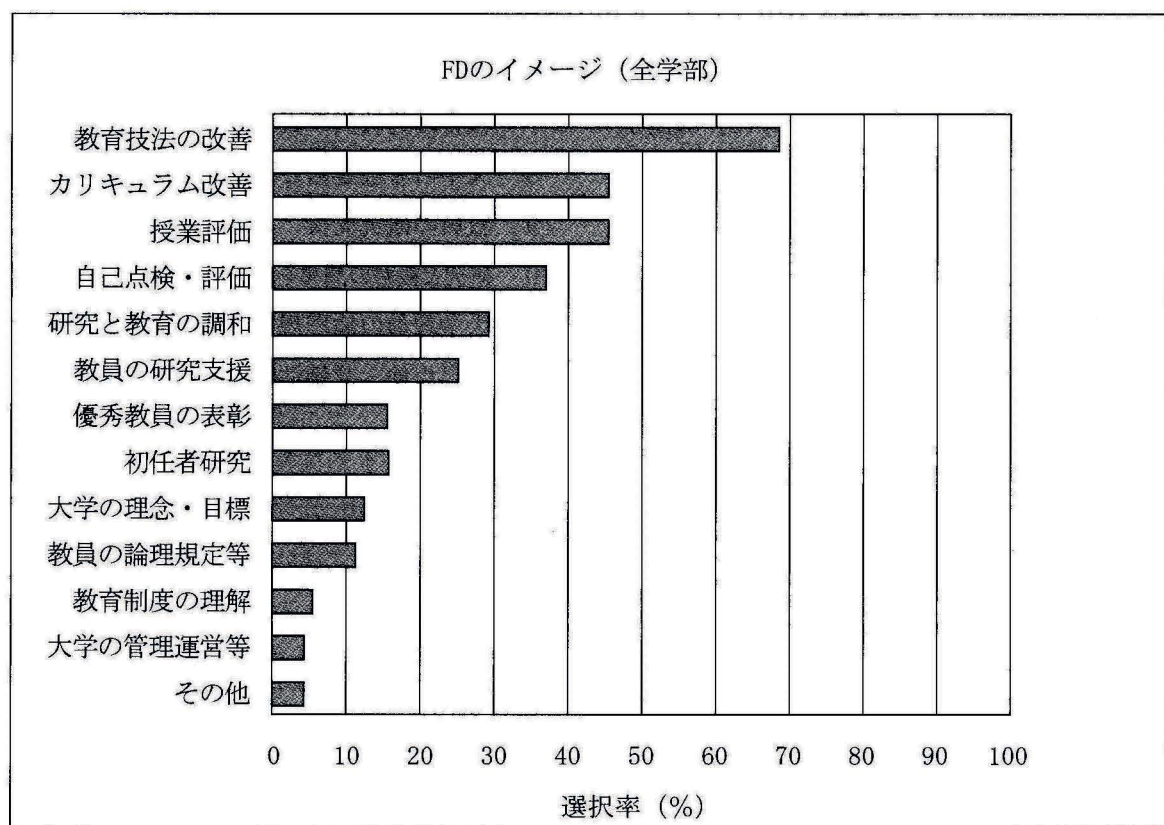
- 1 大学の理念・目標を紹介するワークショップ
- 2 ベテラン教員による新任教員への指導（初任者研修）
- 3 教員の教育技法を改善するための支援プログラム
- 4 カリキュラム改善プロジェクトへの助成
- 5 学校教育法等の教育制度の理解
- 6 アセスメント（授業評価）
- 7 教育優秀教員の表彰
- 8 大学の管理運営と教授会権限についての理解
- 9 教員の研究支援
- 10 研究と教育の調和を図る学内組織の構築の研究
- 11 大学教員の倫理規定と社会責任の周知
- 12 自己点検・評価活動とその利用
- 13 その他

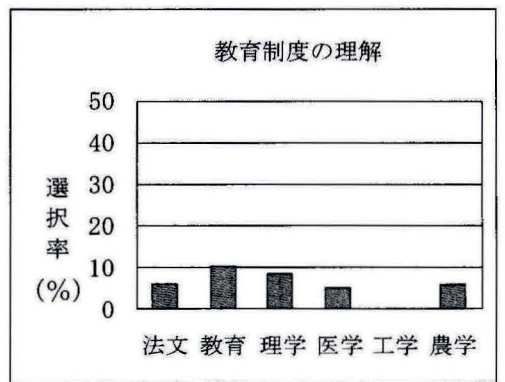
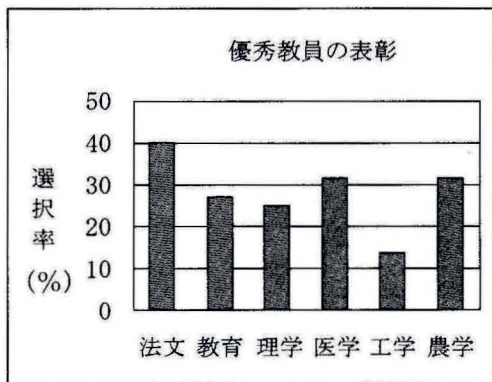
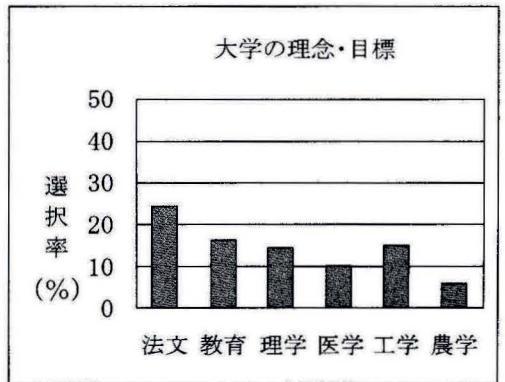
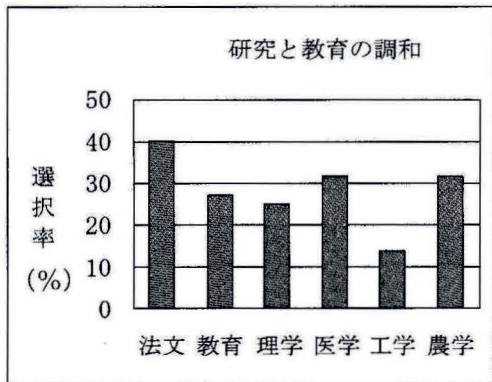
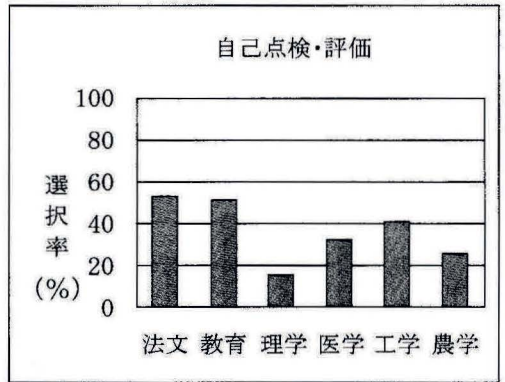
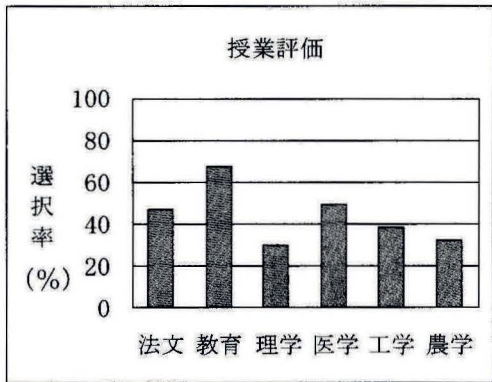
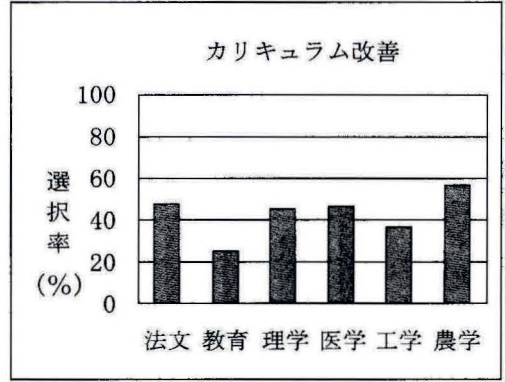
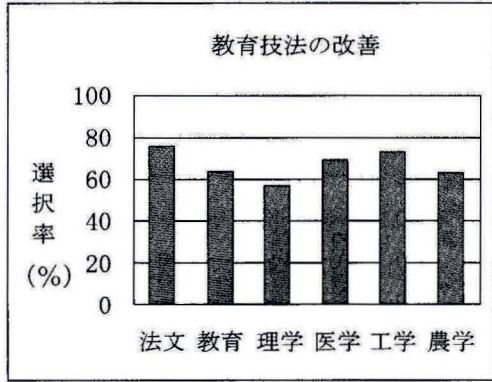
FD活動のイメージとして最も選択率が高かったのは、次頁に示したように「教員の教育技法を改善するための支援プログラム」であった。回答を寄せた教官236名のうち161名（68.2%）が選択した。本学ではFD活動と言えば、先ずは教育技法の改善が頭に浮かぶということになる。次に、50%近い選択率があったのは「カリキュラム改善プロジェクトへの助成」と「アセスメント（授業評価）」であった。これにもう一つ「自己点検・評価活動とその利用」を加えた4項目が、我々が持つFDのイメージの中心をなしていると考えて良いだろう。これらに続くのが「研究と教育の調和を図る学内組織の構築の研究」と「教員の研究支援」であった。こ

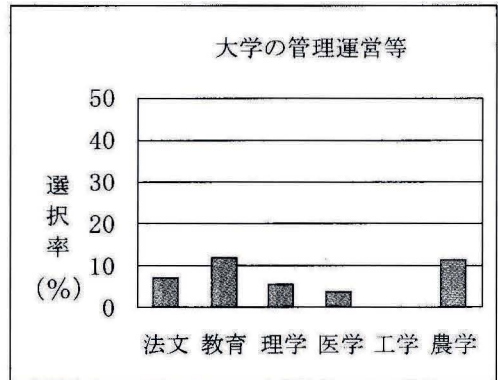
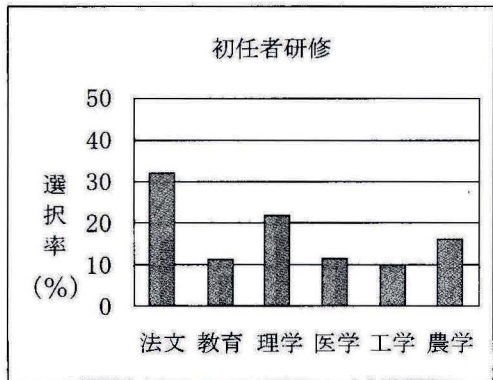
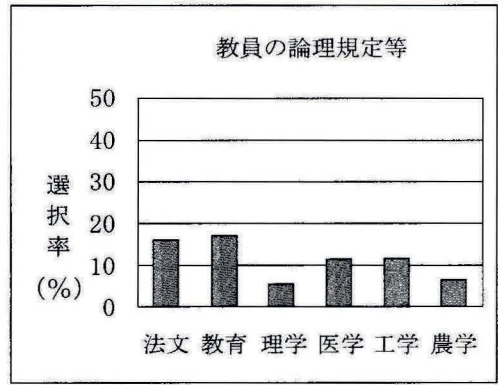
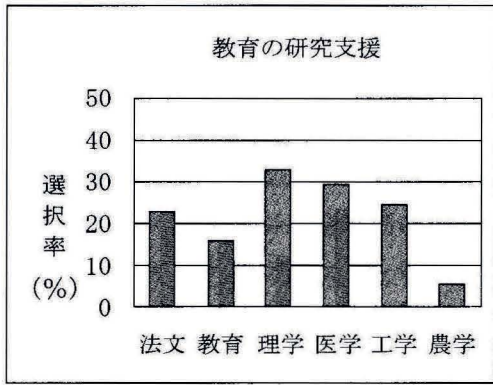
の二つは大学における教育と研究が表裏一体の関係にあるという認識の現れであろう。さらに「教育優秀教員の表彰」と「ベテラン教員による新任教員への指導（初任者研修）」が続いた。

このようなFDのイメージに学部間の違いがあるか見てみよう。「教育技法の改善」は各学部とも60～80%の高い選択率を示し、教育学部だけが僅差で2位だが、その他の学部では総べて1位に上げられた。しかし、2位以下の項目の選択傾向は学部間でかなり異なり、選択率で2～3倍の差があった。したがって、全学的にFD活動を始める契機と学部

ごとの進め方の工夫という点から言うと、FDの具体的な活動目標は全学で画一的に立てるのではなく、各学部の個性や事情に合わせたものが良さそうである。全学的な組織がトップダウン主導するのではなく、各学部のFD委員会等が主体となってその活動に取り組む、全学的な組織は各学部の取り組みを調整し支援する、そういう姿が実効的であろう。FDのイメージとして各学部で共通する上位の項目に着目して学部の計画を立てれば、全学的な連携も図り易いであろう。







2.3 講義の自己点検

(1) 講義でうまくいっている点 (設問5)
 講義で「うまくいっている点」について、以下の11項目(複数選択可)を上げて尋ねた。

- 1 学生の講義への態度が積極的である
- 2 遅刻や欠席が少ない
- 3 予習・復習をよくやってくれる
- 4 学生からの質問が多い
- 5 よいレポートを書いてくれる
- 6 講義の内容を多くの学生が理解している
- 7 試験の点数が高い
- 8 講義をしていて楽しい
- 9 他の教官より評判が良い
- 10 学生の授業評価が高い
- 11 その他

結果は下表のようになった。この回答傾向から

FD活動への契機を探るために、上位5位までで、かつ20%以上の選択率のあった項目に着目し、選択率の高い順に100パーセント積み上げグラフに示す。上位5項目、選択率20%以上と言っても、アンケートの回収率が低かったので、本学教官全体の傾向とまでは言い切れないが、FD活動を計画し進めていくヒントにはなるう。

【設問5】の選択率 (%)

| 項目 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 無回答 |
|----|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 全学 | 44.5 | 39.4 | 5.5 | 23.7 | 13.6 | 24.6 | 5.9 | 31.8 | 11.4 | 25.8 | 6.8 | 7.2 |
| 法文 | 40.0 | 40.0 | 11.4 | 25.7 | 25.7 | 28.6 | 8.6 | 51.4 | 11.4 | 37.1 | 5.7 | 2.9 |
| 教育 | 42.1 | 31.6 | 0.0 | 36.8 | 26.3 | 31.6 | 0.0 | 47.4 | 21.1 | 52.6 | 10.5 | 5.3 |
| 理学 | 41.7 | 45.8 | 8.3 | 4.2 | 12.5 | 29.2 | 0.0 | 41.7 | 12.5 | 8.3 | 12.5 | 12.5 |
| 医学 | 51.8 | 37.3 | 2.7 | 27.3 | 8.2 | 22.7 | 8.2 | 21.8 | 8.2 | 20.0 | 5.5 | 8.2 |
| 工学 | 24.1 | 34.5 | 6.9 | 27.6 | 13.8 | 24.1 | 0.0 | 31.0 | 13.8 | 34.5 | 3.4 | 6.9 |
| 農学 | 47.4 | 57.9 | 10.5 | 5.3 | 10.5 | 15.8 | 10.5 | 26.3 | 15.8 | 21.1 | 10.5 | 5.3 |

| | | | | | | | | | | | | |
|----|----|----|---|----|---|---|--|--|--|--|--|--|
| 全学 | 1 | 2 | 8 | 10 | 6 | | | | | | | |
| 法文 | 8 | 1 | 2 | 10 | 6 | | | | | | | |
| 教育 | 10 | 8 | 1 | 4 | 2 | 6 | | | | | | |
| 理学 | 2 | 1 | 8 | 6 | | | | | | | | |
| 医学 | 1 | 2 | 4 | 6 | 8 | | | | | | | |
| 工学 | 2 | 10 | 8 | 4 | 1 | 6 | | | | | | |
| 農学 | 2 | 1 | 8 | 10 | | | | | | | | |

【設問5】講義でうまくいっている点 (番号は回答項目を示す)

各学部で共通な上位項目として1,2,8がある。「うまくいっている講義」のイメージを言葉で表わすと、「学生が積極的な態度で参加し(項目1)、遅刻や欠席が少なく(項目2)、講義をしていて楽しい(項目8)」となる。そういう感想を持たたとき講義に満足する、あるいは満足しているということになる。この点については次項で改めて考察することにして、ここでは学生による授業評価(項目10)の受け止め方に学部間の違いがあることに留意しておきたい。すなわち、教育学部と工学部ではかなり関心が高く、他の学部ではそれ程でもない。



(2) 講義で改善したい点(設問6)

講義で「特に改善したいと思う点」について、以下の10項目(複数選択可)を上げて尋ねた。

- 1 学生の講義へのモチベーションが低い
- 2 講義中に眠むったり、遅刻や欠席が多い
- 3 予習・復習をしない
- 4 レポートが書けない
- 5 自分の専門性にこだわりをもって勉強しない
- 6 学生の基礎学力が不足しているため、講義がうまくいかない
- 7 基礎学力はあるが、講義がうまくいかない
- 8 試験の点数が低い
- 9 学生の授業評価が低い
- 10 その他

【設問6】の選択率(%)

| 項目 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 無回答 |
|----|------|------|------|------|------|------|-----|------|-----|------|------|
| 全学 | 36.0 | 13.6 | 34.3 | 9.3 | 21.2 | 20.8 | 0.8 | 10.2 | 1.7 | 12.7 | 13.6 |
| 法文 | 40.0 | 14.3 | 42.9 | 8.6 | 14.3 | 20.0 | 0.0 | 2.9 | 0.0 | 11.4 | 14.3 |
| 教育 | 36.8 | 15.8 | 36.8 | 10.5 | 31.6 | 15.8 | 0.0 | 15.8 | 0.0 | 21.1 | 0.0 |
| 理学 | 37.5 | 12.5 | 37.5 | 8.3 | 12.5 | 29.2 | 0.0 | 12.5 | 0.0 | 8.3 | 16.7 |
| 医学 | 30.0 | 10.0 | 29.1 | 6.4 | 18.2 | 10.0 | 1.8 | 7.3 | 3.6 | 13.6 | 20.0 |
| 工学 | 51.7 | 17.2 | 37.9 | 17.2 | 27.6 | 51.7 | 0.0 | 24.1 | 0.0 | 13.8 | 0.0 |
| 農学 | 36.8 | 26.3 | 36.8 | 15.8 | 42.1 | 31.6 | 0.0 | 10.5 | 0.0 | 5.3 | 5.3 |

| | | | | | | | | | | | |
|----|---|---|---|---|---|--|--|--|--|--|--|
| 全学 | 1 | 3 | 5 | 6 | | | | | | | |
| 法文 | 3 | | 1 | 6 | | | | | | | |
| 教育 | 1 | 3 | 5 | | | | | | | | |
| 理学 | 1 | 3 | 6 | | | | | | | | |
| 医学 | 1 | 3 | | | | | | | | | |
| 工学 | 1 | 6 | 3 | 5 | 8 | | | | | | |
| 農学 | 5 | 1 | 3 | 6 | 2 | | | | | | |

【設問6】講義で特に改善したい点(番号は回答項目を示す)

ここでも前問と同様に分析すると、次の2つの項目が改善したい点として上位にくる。すなわち、講義へのモチベーションが低いので(項目1)予習復習をしない(項目3)、あるいは予習復習をしないのでモチベーションが上がらないという学生像が浮かび上がる。

一方、学生の専門性へのこだわり欠如(項目5)については学部間で差がある。農学部では半数近い教官が取り上げているが、他の学部ではそれ程でもない。最も少ない医学部と法文学部でも18%と14%だから、学生の専門性へのこだわりのなさに不満を持たない教官はいない訳だが、学部間の違いとして留意しておきたい。また、学生の基礎学力不足(項目6)についても学部間で違いがある。工学部では半数の教官が、学生の学力不足が原因で講義がうまくいかないとしている点は特徴的である。

以上のように、本学におけるFD活動は学生のモチベーションの高揚を共通的な課題としつつも、力点の置き方は学部によって自ずと変わってこよう。もう一つ、設問6に設問5を重ね合わせてみると、「うまくいっている講義」にも新たな課題が見えてくる。どういう事かと言うと、出席していても学生のやる気が感じられない講義には不満足な感想を持つ(設問6)。その一方で、出席率が高く学生のやる気が感じられる講義には満足する(設問5)。つまり、学生がよく出席し、その講義で教師の話をまじめに聞くなどしてやる気が感じられれば、その講義はうまくいっていると判断してしまう。予習復習をよくやった、よいレポートを書いた、試験の結果が良かったなど学生の学習内容と学習達成に必ずしも結び付けて評価していない。学生の学習達成は不十分でも、講義中の学生の「態度のよさ」で満足してしまっているのではないだろうか。このことは設

問5の10と設問6の9(ともに授業評価に関する項目)の結果からも窺える。すなわち、自分の授業を肯定的に評価する場合には学生の声を根拠にするが(選択率が高い)、否定的に評価する場合には学生の声は根拠にしていない(選択率が低い)。このように、学生からの積極的な質問、自発的な学習、学習達成など学習内容とその結果で講義評価していないかも知れない教師の講義評価基準の曖昧さをFDの課題として上げることができよう。

(3) 講義や実験等の準備で困っていること (設問7)

講義や実験等の準備で困っていることについて、下記の選択肢(複数回答可)を上げて尋ねた。

- 1 講義等の負担コマ数が多すぎる
- 2 出張等により休講せざるを得ないことが多い
- 3 補講が十分できない
- 4 学生の能力に応じた適切な教科書が見当たらない
- 5 講義に使うプリントの作成に多くの時間が割かれる
- 6 視聴覚器機が十分整っていない
- 7 視聴覚器機に使う資料の作成に多大な労力を要する
- 8 実験や実習を行う十分な施設・設備・予算が足りない
- 9 実験や実習を行うためのスタッフが不足している
- 10 その他

【設問7】の選択率 (%)

| 項目 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 無回答 |
|----|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 全学 | 16.1 | 7.6 | 5.9 | 18.2 | 30.5 | 19.5 | 21.6 | 28.0 | 26.3 | 10.6 | 11.0 |
| 法文 | 34.3 | 5.7 | 8.6 | 17.1 | 37.1 | 25.7 | 17.1 | 11.4 | 8.6 | 14.3 | 11.4 |
| 教育 | 47.4 | 15.8 | 5.3 | 15.8 | 42.1 | 47.4 | 21.1 | 31.6 | 15.8 | 10.5 | 0.0 |
| 理学 | 25.0 | 0.0 | 8.3 | 16.7 | 29.2 | 37.5 | 20.8 | 50.0 | 41.7 | 0.0 | 12.5 |
| 医学 | 5.5 | 5.5 | 0.0 | 15.5 | 26.4 | 10.0 | 22.7 | 26.4 | 29.1 | 11.8 | 15.5 |
| 工学 | 0.0 | 13.8 | 13.8 | 27.6 | 34.5 | 17.2 | 13.8 | 31.0 | 27.6 | 10.3 | 3.4 |
| 農学 | 26.3 | 15.8 | 21.1 | 26.3 | 26.3 | 15.8 | 36.8 | 31.6 | 31.6 | 10.5 | 5.3 |

| | | | | | | | | | | | |
|----|---|---|---|---|---|---|--|--|--|--|--|
| 全学 | 5 | 8 | 9 | 7 | | | | | | | |
| 法文 | 5 | 1 | 6 | | | | | | | | |
| 教育 | 1 | 6 | 5 | 8 | 7 | | | | | | |
| 理学 | 8 | 9 | 6 | 5 | 1 | | | | | | |
| 医学 | 9 | 5 | 8 | 7 | | | | | | | |
| 工学 | 5 | 8 | 4 | 9 | | | | | | | |
| 農学 | 7 | 8 | 9 | 1 | 4 | 5 | | | | | |

【設問7】講義や実験等の準備で困っていること (番号は回答項目を示す)

全学の傾向で見ると、プリント教材の準備に苦労している様子が浮かび上がる (項目5)。実験・実習を多くしたいが (項目8) その態勢が十分整っていない (項目9)、視聴覚機器を利用したいが (項目7) 手軽に使える程十分でない (項目6) なども上げられた。

一方、学部ごとの回答傾向に目を向けると、授業のサポート態勢を整える努力は学部ごとに異なるようである。例示すると、法文学部ではプリント教材の作成支援、教育学部ではとりあえず負担コマ数の見直しが必要であろう。理学部では実験設備の点検と効率的利用、医学部では実験・実習の進め方の見直し、工学部では施設設備の利用見直しと実験・実習のマニュアル作り、農学部も実験・実習態勢の見直しが必要ありそうである。

2. 4 FD活動の課題 (設問8)

設問8は、「本学の中期目標・中期計画には各学部におけるFD活動の活性化が明記されています。あなたはどのような活動が (具体的な課題も含めて) 最も重要だと思いますか。また、それに対してどのように係わっていきますか」である。この問い掛けに対し多数の意見が寄せられた。ここでは次頁の表のような4グループに分けて整理してみた。

第1グループは、FDのイメージで1位にランクされた「教育技法の改善」のうち、教官の視点からの意見である。温度差はあるが、各学部から次のような課題が提示された。

- ①講義の自己点検など自己改善努力
- ②教官相互の情報交換
- ③講義の相互評価
- ④若手教官の指導
- ⑤教育優秀教官の表彰と公開授業
- ⑥到達目標の設定とそれに基づく成績評価
- ⑦視聴覚機材の活用と教材作成の支援

①は講義の自己点検を含む自助努力が基本であるといういわば当然の指摘である。②～⑤は総てが個人の責任であった従来の講義スタイルから脱却し、教官は相互にもっと刺激し合うことが必要であるとの認識を示したものである。特に、同僚教官による講

義の相互評価は殆ど総ての学部から提案されている。⑥はカリキュラムやシラバスとも関係する到達目標の設定とそれに基づく適切な成績評価の徹底、⑦は教育現場におけるハードの問題の改善である。

本学のFD活動の課題と係わり方（自由記述を整理・要約）

| 学部 | 教育技法 (教官サイドの問題) | 教育技法 (学生サイドとの関連) | カリキュラム 授業評価 自己点検・評価 | FD活動 その他 |
|----|--|---|--|--|
| 法文 | 講義の自己点検 教官相互の情報交換 授業のノウハウの共有 新任・昇進教官の研修 優秀教員の公開授業 成績評価の客観的基準 | 専門能力の向上 双方向授業の実施 学生参加の講義計画 | 共通教育の見直し 授業評価の公開とその活用 自己点検・評価を頻繁に実施する | 教育委員会の活用 コミュニケーションの場作り ボトムアップ型FDの実践 英語FDに4ヶ年参加 教育業績評価制度 教育改善の予算化 教育研究環境の整備 |
| 教育 | 教官の自己改善努力 学生を伸ばす愛情 若手教官の研修 教官による研究授業 同僚による講義評価 | 学生の学力低下対策 (漢字、計算、英語、パソコンがダメ) 教育補助員制度 学力アップの読書会 講義の要望を聞く | | 教育改善のグループ作り 負担コマ数の軽減 世の中の動きに振り回されすぎ 委員会をさぼらない 研究成果の地域貢献 |
| 理学 | 学問分野の資質の向上 講義録のHPでの公開 講義の相互評価 教育設備の充実 教材の充実 | TAの充実 | 教育目標に基づくカリキュラム 学力に応じたカリキュラム カリキュラムの充実 登録手続の電子化 | 学力に見合う教育改善FDプログラム 教育費の予算化 研究環境の充実 会議等を減らす |
| 医学 | 講義の自己評価 教育者の資質の向上 教官の倫理の向上 教育法のガイドライン 教育力増進を図る研修 教官による相互評価 若手教官の指導 教育表彰制度の実施 到達目標の設定とそれによる成績評価 視聴覚機器の活用 講義ノートのテキスト化支援 教材作成設備の充実 | 学生の理解度をCBT試験でチェック 参加型授業の実施 学生との対話促進 講義の要望を聞く 小人数教育の推進 問題志向型教育 クリニカルクラークシップの早期導入 チューター制自主学习 自発学習を促す努力 モチベーションを高めるシラバスと講義法 | 基本ポリシーによるカリキュラム 基礎と臨床の有機的カリキュラム編成 学生が興味を持てるカリキュラム 基礎学問の重視 実験・実習の重視 後期臨床実習の改善 英語力の絶対的向上 科目間の重複チェックや講座間の連携 授業評価結果の活用 モチベーションのない学生の評価は疑問 | 学部、学科FD委員会 FD講演会・研修会 モチベーションを高めるFD 実習指導FDプログラム 教育専任教官の配置 教官、技官の再配置 学科間の情報交換 無関心教官の啓蒙 研究体制の整備 研究費の獲得 地域と連携した研究 サバティカルで教育 研修 研究と教育の両立 教育に専念できる環境 |
| 工学 | 講義準備の時間確保 効果的教育法の探究 教育・指導方法の向上 教員の相互評価 教官同士の授業参観 適切な到達目標の設定 | 学力低下への対策 講義内容の低レベル化対策 質疑応答時間の確保 学生との対話 学生の要望を重視 学習意欲の向上を図るWebの利用 学習態度の指導 | 社会ニーズに合ったカリキュラム カリキュラムに対する学生の意識調査 資格取得の教育体制 講義の重複チェック 授業評価結果の公開とフィードバック | JABEE認定作業に参加 教育業績評価制度 学生の経済的負担の軽減 研究と教育の連係 独創的な研究 |
| 農学 | 視聴覚機器の整備 教官の意識改革 休講の防止策 教職基礎科目の再教育 教官相互の公開授業 教育優秀教員の表彰とその教員による指導 ティーチングボードフォリオの活用 教材作成の講習会 | 講義へのモチベーションを高める工夫 職業を意識した教育 勉学意欲の向上 学習態度の改善(ノートを取る、参考書を買う) | 必修科目の削減 インターンシップや実習教育の重視 授業評価の公表 教育研究評価の頻繁な実施 自己点検評価の活用 | FD委員会の設置 学科を旧体制にもどす 研究成果の社会還元 |

第2グループは「教育技法の改善」のうち、学生サイドとの関連に注目した次のような課題である。

- ①基礎学力不足への対策
- ②双方向、参加型授業の実施
- ③少人数教育とTA等の活用
- ④講義内容等の要望を聞く
- ⑤モチベーションを高める工夫
- ⑥学習態度の改善

①の基礎学力不足への対策は近年、各学部で大きな問題のようである。②と③は授業方法やその形態を工夫することにより、従来の一方向的な講義からの転換を図ろうとする意見である。④～⑥は学生をもっと主体的に授業に取り組ませることの必要性を指摘したもので、学生の要望を取り入れたり、もっと興味が湧くような講義を目指すことなどにより学習意欲を高めようというものである。

次に第3グループは、FDのイメージで2,3,4位であった「カリキュラムの改善」「学生による授業評価」「自己点検・評価」に関する課題で、

- ①教育目標に基づくカリキュラム編成
- ②社会のニーズ、学生の能力に応じたカリキュラム編成
- ③講義内容の重複等のチェック体制の構築
- ④学生による授業評価とその活用
- ⑤自己点検・評価の不断の実施とその活用

などである。①と②は教育目標の設定とそれに基づくカリキュラム編成などカリキュラムについては不断の見直しが必要であるとする当然の指摘である。学部によっては実験や実習をもっと重視すべきという意見も多い。③は講義内容の重複などをチェックし、講座間連携を図るシステムの構築の問題である。④は学生による授業評価の実施と結果のフィードバック、⑤は自己点検・評価とその活用である。

最後に、第4グループはFD活動組織のあり方などについての意見であり、

- ①学部ごとのFD委員会の設置
- ②各学部に応じたFDプログラムの実践
- ③教育業績評価の制度化
- ④教育予算の確保
- ⑤研究環境の整備
- ⑥教育に専念できる環境作り

などである。①と②はFD活動組織やそのプログラムを各学部で主体的に実施すべきであるとする意見であり、多くの具体的なFDプログラムの提案がなされている。③は難しい教育業績評価の制度化、④～⑥は教育・研究環境の整備充実を訴える意見である。

2.5 FD活動のあり方（設問9）

アンケートの最後に、本学のFD活動のあり方について自由に記述してもらった。数多く寄せられた意見を4つのグループにまとめた。意見の中には前問の回答と重複するものも多かった。

FD活動システムに関しては、具体的なFD活動プログラムの提案に加えて、各学部あるいは場合によっては学科レベルでFD活動組織を作るべきであること、それら組織を通じて学部間の情報交換を行う必要があることが殆どの学部から提案されている。教育技法に関しては、シラバス未提出教官の指導など未だにこの種の声があることに驚きを隠せないが、その他の意見は前問の回答と同様である。授業評価については、学生の評価能力に疑問を呈する意見がある反面、評価結果の公開とその積極的活用を指摘する意見も多かった。その他では、無関心教官の啓蒙や形だけのFDへの危惧など真摯で貴重な意見が数多くあった。

本学FD活動のあり方（自由記述を整理・要約）

| 学部 | FD活動システム | 教育技法 | 授業評価 | その他 |
|----|---|---|---|--|
| 法文 | 語学(英語)のFDへの全学的参加 ボトムアップ型FDの予算枠の拡大 FD研究報告会の開催 FDの成果の活用 FDの成功例の紹介 FDへの学生参加 FD関連資料を大教センターで収集公開 | 講義の同僚への公開 教材準備の予算化 | 評価結果の自由記載部分の公開(共通教育) | 教官のモチベーションを高める場作り 外部によるチェック FD活動の目標を見失わないように 評価のための評価はダメ |
| 教育 | 学部毎のFD委員会 | 授業研究会の開催 授業の進め方を予習・復習する シラバス提出の徹底 | 授業評価で本音を語らせる工夫 評価の公開と教育改善への活用 | 教育における責任のあり方の自覚 教員採用システムの改善 研究業績の公表 アリバイ作りは不可 多忙で活動できない |
| 理学 | FD活動の活発化 各学部のFDポリシーの明確化 学部間の情報交換(工学部から依頼のJABEE対応が不十分) | 研究授業の実施 共通教育の分担等の見直し 共通教育現場のサポート体制が貧弱 教材作成の支援 | 教務課による授業評価 学生の評価能力が疑問 評価結果の公表とフィードバック | 教育予算の確保 |
| 医学 | 学部、学科のFD委員会 教育企画室と教育専任教官の配置 医学部に特化したFD FDの目標の具体化とフェアな検証法の確立 FD推進のWG立上げ 柔軟なFD活動 学部間の情報交換 教育業績評価法の確立 | 医学部固有の教育法の開発 学外交流など講義工夫 問題発掘型の教育体制 能力別クラスの導入 各教科間の内容の確認 シラバス未提出教官の指導 | | 形だけのFDは不可 教員の意識改革 入試の廃止と厳格な教育 教育と研究のための時間の確保 FDは必須 現行のFDは表面的 FDという用語が不適當 FDが未浸透 |
| 工学 | 委員会による授業方法等の改善勧告 教育改善組織の学科内設置 FDの目標設定 教育業績評価との連動 | 教官相互の情報交換 教官の教育法の研修 講義法教本を学ぶ 講義法の相談窓口開設 進級試験など厳格教育 学生との情報交換 | | 無関心教官の啓蒙 他大学との情報交換 教官の社会貢献 |
| 農学 | | 教育手法等の再教育 レベルに合った教育 同一科目の複数教官の評価の統一 | | 教員の意識改革 FD活動の成果物は評価対象 在外研究制度の拡充 |

3. 本学のFD活動に関する提言

ここでは今回のアンケート調査結果に基づいて、本学のFD活動やその組織のあり方について提言する。

○FD活動の内容

FD活動のイメージとして「教員の教育技法の改善」の選択率が最も高かった。そして、「カリキュラム改善」「アセスメント（授業評価）」「自己点検・評価活動とその利用」と続いた。「教育技法の改善」は殆ど総べての学部で1位だったが、その他の項目では学部間で選択率に差があり、FDのイメージに微妙な違いがあった。このことから、本学のFD活動はこれら4項目を中心にそれぞれの学部の実情や特色に応じて実施する必要があるだろう。

○講義の自己点検

「講義で改善したい点」の分析から、学生の「専門性へのこだわり」や「基礎学力アップ」に加えて、全学共通の課題として「モチベーションの高揚」が浮かび上がった。その一方で、「うまくいっている講義」を、良く出席し教師の話を真面目に聞いているなど学生の「態度の良さ」だけで見ていないか、換言すれば積極的な質問、自発的な学習など学習内容とその結果で自身の講義を評価していないかも知れない教師の講義評価基準の曖昧さも克服すべきFDの課題であろう。また、「講義や実験等の準備で改善すべき点」としては、教材作成の支援、実験・実習体制の整備、視聴覚機器の充実なども上げられた。

○FD活動の課題

本学におけるFD活動の課題を整理すると次のようになる。なお、これらの課題に対する取り組み方には、各学部で自ずと軽重があるだろう。

【教育技法の改善（教官サイドの視点から）】

- ①講義の自己点検など自己改善努力
- ②教育力アップを図る相互評価や情報交換
- ③到達目標の設定とそれに基づく成績評価の徹底
- ④視聴覚機材の活用と教材作成の支援

【教育技法の改善（学生サイドとの関連から）】

- ①基礎学力不足への対策
- ②双方向、参加型、少人数教育の実施
- ③講義に学生の要望を取り入れるなど学習意欲を高める工夫

【カリキュラム改善，学生による授業評価および自己点検・評価】

- ①教育目標等に基づくカリキュラムの不断の改善
- ②科目間の内容，連携等のチェック体制の構築
- ③学生による授業評価とその活用
- ④自己点検・評価の実施とその活用

【FD活動組織のあり方他】

- ①学部ごとのFD委員会の設置とFDプログラムの実践
- ②教育業績評価の制度化
- ③教育研究環境の整備

○FD活動のあり方

各学部あるいは学科レベルでFD活動に関する組織を作ること、それらの組織を通じて学部間で情報交換することが重要であろう。さらに、教育オンチ(?)教官の啓蒙など教官のモチベーションの高揚やFD活動を形だけに終わらせないようにすることも必要であろう。

○本学のFD活動組織

FD活動を実施するための組織を各学部あるいは場合によっては学科ごとに適切な形で創設することが必要である。主要なテーマは教育技法の改善だが、ただ単に教員の教育能力や指導方法の向上という視点からの活動だけでなく、学生との交流に基づく教育法、講義法の模索など学生サイドを十分意識した活動が大変重要であろう。その他の課題をも含めて、解決すべき課題を学部の実情や特色に応じて掘り起こし、実りあるFD活動が各学部で主体的に実践されることが期待される。

同時に、学部の活動を支援し、学部間の情報交換や学内の諸活動の調整を行うための全学的組織も必要となろう。ただし、その組織は本学全体を視野に

入れ腰の落ち着いた活動ができるように、大学教育センター教官をも含めた常設機関として、センター内に設置する必要がある。

なお、以上の本提言の骨子は、平成15年9月にまとめられた本学の中期目標・中期計画（素案）とほぼ軌を一にしていることを付記しておく。

おわりに

FDワーキンググループにいわば強制的に指名された一昨年の8月以来、この道の専門家でもない各委員には長い道のりであった。過去の蓄積から調べ始めたが、余りにも課題が大きすぎて展望は簡単には開けなかった。その一方で、大学の大きな目標・計画が次々と打ち立てられ、「FD活動はしなくても良い」という選択肢はもはや存在しないという状況

に立ち至った。

このような認識に立って本アンケート調査を行ったが、回収率が低かったわりには真摯で貴重な意見が数多く寄せられた。これは、本学教官が日頃、自身の講義で大いに悩み苦しみ、改善策を目指して日夜格闘していることの証しと理解したい。

FD活動は大学教員の仕事の一部分という認識が残念ながら未だ十分に共有されていないのだが、何をどこまで共有するかという議論をも含めて、FD活動を始める計画を立て、とにかく実施してみることである。ただし、「FD活動の義務化」がいたずらに過重に成らない見通しを持つことも課題であることを強調しておきたい。FD活動の進め方に工夫と計画性が求められる所以である。

（完）

大学教育改善等専門委員会

FDワーキンググループ

○天野 輝久（工学部）

小田切忠人（教育学部）

堀内 敬三（理学部）

林 弘也（農学部）

屋 宏典（遺伝子実験センター）

【WG1の活動経過】

- | | | |
|------|-----------|---------------------|
| 第1回 | （平成14年8月） | 責任者の決定 |
| 第2回 | （同 9月） | テーマの確認 |
| 第3回 | （同 10月） | センター長、研究開発部門長との話し合い |
| 第4回 | （同 11月） | 教育学部の既往のFDの学習 |
| 第5回 | （平成15年2月） | FDの考え方についての話し合い |
| 第6回 | （同 4月） | アンケート調査を行うことを決定 |
| 第7回 | （同 6月） | アンケート内容の検討 |
| 第8回 | （同 6月） | 同上 |
| 第9回 | （同 10月） | 同上 |
| 第10回 | （同 10月） | 同上 |
| 第11回 | （平成16年1月） | アンケート結果の検討 |
| 第12回 | （同 2月） | 答申の取りまとめ |
| 第13回 | （同 2月） | 同上 |